悠・遊・友、そして意宇
“志人道”を生きる

ゆう科学通信

Vol.23
Jan. 1月
2016年1月9日発行

発行：八雲志人館
〒690-2102
島根県松江市八雲町東岩坂3442-9
電話・FAX 0852-54-1023
E-mail／shijinkan@bell.ocn.ne.jp

一村一志

「夢の芽生える文化」創造のプラットホーム「八雲志人館」は、将来に向けて持続可能な地域を創出することをめざして活動します。

先人の言葉に学ぶ

2016年の正月三が日は穏やかな天候に恵まれました。ところが、1月3日、イランとサウジアラビアの国交断絶が発表されました。翌4日の大発会（新年最初の営業日）では、中国はじめ世界同時株安の流れのなかで株式市場が暴落。そして、6日には、北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）が4度目の核実験を実施。第3次世界大戦に向かう危険性が強く懸念される波乱の年明けとなりました。

危機の時ほど浮足立たず、重心を低くする必要があります。

「深く歴史を吸い込み、静かに吐き出す時、我々の立つべき視座が見えてくる」。『二十世紀と格闘した先人たち』という著作の中で、寺島実郎氏はこう述べています。

そこで、先人たちがのこした言葉を、戦争に関わるものを中心に集めてみました。この「引用の織物」が、歴史に学び、未来を考える時の一助になれば幸いです。

女性初のノーベル平和賞
ベルタ・フォン・ズットナー

人類を絶滅できる道具

「今や空は征服されて――我々はあらゆる国境の上を飛び越え、空高く放物線を描き――そしてついに戦争はもう一つの新たな武器を得た。しかもその武器は、今までに用いられたあらゆる武器の中で最も恐ろしいものであることが、明らかとなった」。

女性初のノーベル平和賞受賞者であるベルタ・フォン・ズットナーは、新しく発明された飛行船や飛行機が武器として使用されることによる大量殺戮と壊滅的な破壊を、1914年の第1次世界大戦勃発前に、『空の野蛮化』（訳　糸井川修・中村実生）という論文で、こう予言しました。

そして、イギリスの元首相ウィンストン・チャーチルは、第1次世界大戦を総括した著書『世界の危機』で、こう言っています。

「戦争からきらめきと魔術的な美がついに奪い取られてしまった。アレキサンダーや、シーザーや、ナポレオンが兵士達と共に危険を分かち合い、馬で戦場を駆け巡り、帝国の運命を決する。そんなことはもう、なくなった。これからの英雄は、安全で静かで、物憂い事務室にいて、書記官達に取り囲まれて座る。一方何千という兵士達が、電話一本で機械の力によって殺され、息の根を止められる。これから先に起こる戦争は、女性や、子供や、一般市民全体を殺すことになるだろう。やがてそれぞれの国には、大規模で、限界のない、一度発動されたら制御不可能となるような破壊のためのシステムを生み出すことになる。人類ははじめて自分たちを絶滅させることのできる道具を手に入れた。これこそが人類の栄光と苦労のすべてが最後に到達した運命である」。

ウィンストン・チャーチル

上空から爆弾をばら撒くことにより、兵士だけでなく、市民をも巻き込んだ一方的な大量殺戮行為が第1次世界大戦から始まったのです。そして、その極限として核兵器が生まれ、第2次世界大戦でのヒロシマ、ナガサキの惨劇が引き起こされました。人類は科学の発展の果てに、人類自らにとどまらず、地球そのものを滅ぼせる技術を手に入れたのです。

百万の殺人は英雄

さらに時代をさかのぼってみましょう。

「戦争を面白がるのは、戦争を経験したことのない者だけだ」。古代ギリシャ（紀元前）の詩人ピンダロスは、こう言っています。

18世紀のプロイセン王フリードリヒ2世の「すべての人間は己の内に猛獣を潜めている」という言葉に、16世紀のイギリスの思想家トマス・モアの「戦争は畜類がするにふさわしい仕事だ。しかもどんな畜類も人間ほど戦争をするものはない」という言葉を組み合わせて噛みしめてみてください。

戦争に至る人間心理についての名言もあります。

19世紀に軍事学者として活躍し、『戦争論』を著したクラウゼヴィッツは、こう言っています。「恐怖感を持つ人間は、善いことよりも悪いことを信じやすく、悪いことは誇大に考えやすい」。

次は作家・芥川龍之介の言葉です。「我々に武器を執らしめるものは、いつも敵に対する恐怖である。しかもしばしば実在しない架空の敵に対する恐怖である」。

そして、いざ戦争が起きると、人間はどうなるか？　アメリカの名優・チャップリンは、こう本質をついています。「一の殺人は悪漢を、百万の殺人は英雄を生む。数量が神聖化するのである」。

条理の側に立つ勇気

戦争を経験したアメリカの作家、アーネスト・ヘミングウェイの言葉は、こうです。「往時においては、母国のために死ぬことは心地よく、ふさわしいものであると書かれたが、近代戦争では、戦地が心地よく、ふさわしいものは何もない。諸君は犬のように死ぬであろう」。

1962年、米ソ対立が核戦争寸前までいった、いわゆる「キューバ危機」を体験した二人の指導者は、こんな言葉をのこしています。

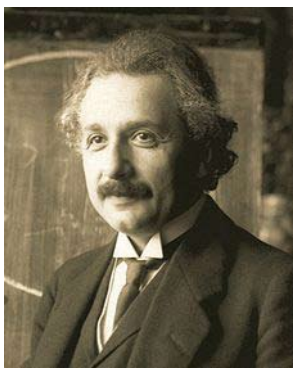
「戦争は小銃の偶発から始めることができる。ところが、戦争を終結させることは、経験豊かな国家指導者さえ容易なことではない。流血をとどめるのは、ただ理性だけだ」（旧ソ連の最高指導者ニキータ・フルシチョフ）。

「人類は戦争に終止符を打たなければならない。それでなければ戦争が人類に終止符を打つことになろう」（アメリカ大統領ジョン・F・ケネディ）。

相対性理論で有名で、1921年にノーベル物理学賞を受賞したアルベルト・アインシュタインは、こう言っています。

「第3次世界大戦が、どんな武器で戦われるのかは分かりません。ただ、第4次世界大戦は、棒と石で戦われるでしょう」。核兵器による人類の文明の崩壊を予言した言葉です。

アインシュタインは1955年、哲学者　バートランド・ラッセルとともに核兵器の廃絶や戦争の根絶、科学技術の平和利用などを世界各国に訴える「ラッセル＝アインシュタイン宣言」を発表しました。



アルベルト・アインシュタイン

未来に向けて、今どのように行動すべきかを考える時の参考に、次の二人の言葉を紹介します。

「沈黙したり、無気力であったり、諦めていてはならない。あなた方の良心のためらい、心の内にある抗議の声を、『どうせ無駄だから』という臆病な嘆息で抑圧してはならない。無駄なことは、ひとつもない。悪いことが起こるときは、それを行う人だけでなく、それを黙って見過ごす人にも罪がある」（『空の野蛮化』ズットナー）。

「条理の側に立つ勇気。二十一世紀の日本に求められるものはその言葉に凝縮されると思う。例えば、『非核平和主義』という日本近代史への反省から到達した理念を空洞化させることなく、核廃絶の先頭に立つことなど、歴史を前に進める条理の側に立つ姿勢こそ、価値ある二十一世紀を創造するものと信じる」（『二十世紀と格闘した先人たち』寺島実郎）。

（交易場修）

平和の花 スノードロッププロジェクト

通常2月末に開花するのですが、暖冬のためか、1月9日の時点で、約450個の球根の内3割ほどがすでに花を咲かせています。

雪を割って立ち上がる、本来の花の姿を、ご報告できる日を楽しみにしております。

（スノードロップは松江市八雲町の周藤彌兵衛翁銅像前で咲いています）

〈後記〉
「ゆう科学通信」は皆様からのご意見、情報を礎に発信していきます。
ご投稿はメール、ファクスでお願いいたします。